

※「日本髪用髪飾り」のつづき

簪

日本髪を彩る簪は、江戸時代後期から明治時代にかけて必需品的
装身具として発達し、大正時代へと引き継がれた。

日本髪用簪には、大別すると、平らな「平打簪」と宝石を丸く研
磨した「玉簪」がある。

図1-8-32と図1-8-33はその着用図。いずれも後ろ挿し。



図 1-8-32

銀平打簪着用図

明治41年11月『婦人画報』

より



図 1-8-33

玉簪（サンゴ）着用図

大正7年5月『婦人世界』

より

ここでは、最初に大正前期頃流行の貴金属の平打簪とべっ甲など
の平打状簪を紹介し、次に各種の玉簪を紹介する。

図1-8-34、図1-8-35はカタログからの平打簪。

これらのカタログに出ている簪はすべて金製で、ほとんどに一部

図1-8-36、図1-8-37は金の平打簪の実物。図1-8-38は金の上に蒔絵・螺鈿を施した平打簪。金簪のほとんどは潰されてしまっていて残っているものは僅かである。

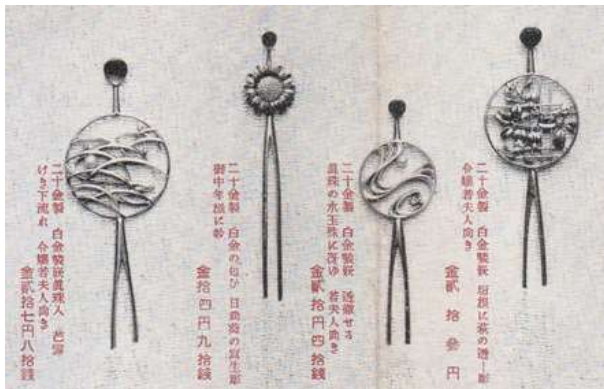


図 1-8-35

金の平打簪

K20 プラチナ交り

大正5年9月『尚美堂時報』より

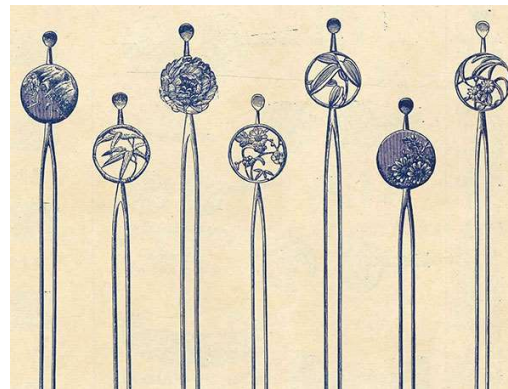


図 1-8-34

金の平打簪

K18、K20、K22 にプラチナ交り

大正3年『三越』付録「金銀細工帯留
と頭飾品目録」より

プラチナが使われている（プラチナ交り）。大正時代にはプラチナは金を大きく凌ぐ高価な貴金属であり、こうした簪は明治時代にはあまり見られないものだった。
また足はすべて松葉形で、明治期にしばしば用いられていたU字かえるまた形の蛙股足は姿を消しスッキリした形になった。

1-8-39から図1-8-41は銀の透かし簪。
 銀の簪は数多く残っている。そのなかから一部を紹介する。図1



図 1-8-38
 金 (K18) 蒔絵・螺鈿簪
 桜と梅図
 裏にも蒔絵・螺鈿で桜と松の
 めでたい模様。



図 1-8-37
 金薄肉彫り透かし平打簪
 抱き^{みょうが}茗荷図



図 1-8-36
 金 (K20) 透かし平打簪
 プラチナ交り
 菊と^{きょうちくとう}夾竹桃 (?) 図

金簪への憧れは強かったがすべての女性が金簪をつけられるわけではなかった。そこで図1-8-42、図1-8-43のような銀に金銷しきんけ(めっき)を施した平打簪がたくさん作られた。



図1-8-41
銀透かし平打簪
しろつめぐさ
白詰草と菊図



図1-8-40
銀透かし平打簪
孔雀と菊図
孔雀の尾羽おぼねを強調したデザインは大正前期によく用いられた。



図1-8-39
銀透かし平打簪
笹と菊図



図 1-8-44
真珠入りべっ甲簪
菊模様の花芯部に小粒真珠

以上は金、銀など貴金属の簪だが、明治時代ほどではないが、べっ甲の平打状の簪の愛好者も多かった。また、べっ甲を模した安価なセルロイドの簪も作られた。
図 1-8-44、図 1-8-45 はべっ甲簪、図 1-8-46 はセルロイド簪。



図 1-8-43
銀に金銷し透かし平打簪
菊図



図 1-8-42
銀に金銷し透かし平打簪
つづみ鼓と葉図



図 1-8-45
扇子形べっ甲簪
中央に三ツ柏紋



図 1-8-46
セルロイド簪
菊図

この頃には、べっ甲に蒔絵・螺鈿を施した優雅な簪も作られていた（図 1-8-47）。



図 1-8-47
べっ甲蒔絵螺鈿簪
竹図

ここからは大正前期に用いられた各種の玉簪を見ていく。玉簪用の宝石には、明治時代からのサンゴ、めのう、孔雀石（マラカイト）、水晶類、そして明治40年前後からのヒスイの人気が続いた。天然のヒスイやサンゴが身につけられない女性のためには、遠目には見分けが付きにくい着色ガラスによる模造品が天然の何倍も作られた。

図 1-8-48 はサンゴの玉簪。江戸後期から用いられていたサンゴ

の玉簪は大正時代でも人気で、この時代には地中海産サンゴ（胡渡こわたりサンゴ）に替わり、主に日本産の高知のサンゴが使われた。



図 1-8-48

サンゴの玉簪

上=K18 足、下=K20 足

色の好みはいろいろだが大正期には柔らかな色合いの桃色系の人気が高まった。

図 1-8-49 は白サンゴの玉簪。白サンゴの玉簪は明治中期から使われているが、多く用いられたのは大正時代から。



図 1-8-49

白サンゴの玉簪

銀に金銷し足か

図 1-8-50 は透明度が高く、冴えた色の琅玕質ろうかんのヒスイの玉簪。白地に緑色が交ったものや暗緑色のものは多かったが、この光沢のものは数が少なく貴重。

面にファセットカットを施した切子玉きりこの水晶簪、**図1-8-53**はオーソドックスな丸玉の水晶簪。**図1-8-54**は、表



図1-8-52
孔雀石（マラカイト）の玉簪
金色合金足

図1-8-52は孔雀石（マラカイト）の玉簪。明治時代から用いられている玉簪で、濃い緑色と特有の縞模様を好む女性に人気だった。



図1-8-51
めのうの玉簪
銀足
玉表面は上品にマット仕上げ。

図1-8-51は、めのうの玉簪。大正時代には玉の部分だけめのをを使ったものから、このように、耳搔き部から軸の上部までがめのうの玉簪も作られた。



図1-8-50
ヒスイの玉簪
金足
高価だった琅玕質のヒスイ。

セットカットのアメシスト(紫水晶)の簪。いずれも甲府製だろう。



図 1-8-53
水晶の玉簪
白色金属足



図 1-8-54
水晶の切子玉簪
銀(金銷し)足



図 1-8-55
紫水晶の切子玉簪
銀(金銷し)足

大正時代にはセルロイドやガラスの模造サンゴ玉やガラスによるヒスイ玉の模造品がたくさん作られた。図 1-8-56 はサンゴの模造品。図 1-8-57 はヒスイの模造品。いずれもガラス製。



図 1-8-58
茶金石（アベンチュリン・ガラス）の玉簪
白色金属足

サンゴ、ヒスイの模造玉以外にもガラスの玉簪があつた。図 1-8-58 は江戸末期から用いられていた茶金石と称されたアベンチュリン・ガラスの玉簪。この玉簪は大正前期以降にも用いられている。



図 1-8-57
ヒスイの模造品
金色金属足
失透処理により透明度をおさえたガラスを使用。



図 1-8-56
サンゴの模造品
白色合金足
サンゴに似てはいるが、表面の光沢が不自然。